

札幌国際芸術祭 篇

新しい 芸術祭の つくり方

Designing
a Next
Generation
Art
Festival



15回の「SIAFよもやま話」をまとめた 「SIAFよもやま本」

2024年2月に終了した札幌国際芸術祭(SIAF)2024。SIAF事務局では、その内容を単にアーカイブとして残すだけでなく、これからの糧にしようという思いから、事務局視点の「つくり方」も加えて、記録集『新しい芸術祭のつくり方 札幌国際芸術祭篇』を制作し、同年7月に公開しました。この記録集は、アーカイブ要素として写真を多用した前半と、テキストで事務局機能を紐解く後半の二部で構成されています。しかしながら、ページ数も制作期間も限られていたため、芸術祭に関する全ての要素を網羅することはできませんでした。そこで、この記録集を補完するようなアイデアが編集作業と同時並行で話し合われました。

その結果、実施することにしたのが、トークシリーズ「SIAFよもやま話」です。

このシリーズでは、記録集を教科書に見立て、各ページに関連するゲストを迎え、内容を掘り下げるインタビューを実施しました。SIAF2024開幕に向けた現場のリアルな状況やそのプロセス、ノウハウ、そして次回SIAF2027に向けた構想などを収録し、その内容を動画と、ハイライトを紹介するPDFにまとめ、計15回の公開が実現しました。

本書は、「SIAFよもやま話」のPDF全15回分を一冊にまとめた「SIAFよもやま本」です。

よもやまだけに、ご覧いただければ幸いです。

この副読本もまた、記録集『新しい芸術祭のつくり方』と同様に、これからのSIAF、そしてひいては文化の現場に関わる方にとっての参考になることを願っています。

最後になりましたが、ご出演いただいたみなさまに改めて感謝申し上げます。

札幌国際芸術祭実行委員会事務局

目次

1 - 「あげつく」編集チーム	2
2 - 宮井和美 [公益財団法人 札幌市公園緑化協会 モエレ沼公園 学芸員]	4
3 - 木ノ下智恵子 [SIAFコミッティーメンバー／札幌文化芸術交流センター SCARTS 事業統括ディレクター]	6
4 - 中村聖司 [北海道立近代美術館 学芸副館長]	8
5 - 佐藤康平 [公益財団法人札幌市芸術文化財団 札幌文化芸術交流センター SCARTS] 坂本真惟 [公益財団法人 札幌市芸術文化財団 札幌芸術の森美術館 学芸員]	10
6 - 草野竹史 [NPO 法人 ezorock 代表理事] 東 輝 [NPO 法人 ezorock 総務担当]	12
7 - 端 聡 [アーティスト・CAI03主宰] 吉崎元章 [SIAFコミッティーメンバー／公益財団法人札幌市芸術文化財団 本郷新記念札幌彫刻美術館 館長]	14
8 - マユンキキ [アイヌの伝統歌を歌う「マレウレウ」メンバー／アーティスト]	16
9 - 丸田知明 [丸田知明建築設計事務所]	18
10 - 片岡 泰 [札幌国際芸術祭実行委員会 事務局長]	20
11 - 工藤“ワビ”良平 [デザイナー] 白井宏昭 [デザイナー]	22
12 - 小川秀明 [札幌国際芸術祭2024ディレクター／アルスエレクトロニカ・フューチャーラボ芸術監督] 細川麻沙美 [札幌国際芸術祭事務局 統括マネージャー]	24
13 - 漆 崇博 [札幌国際芸術祭事務局マネージャー／一般社団法人 AIS プランニング 代表理事]	26
14 - 宿院卓馬 [パノラマティクス プロデューサー] 河村佳祐 [パノラマティクス リサーチャー]	28
15 - 連携プロジェクト「みんなでウパシテ!!」	30

※肩書きは動画公開当時のもの



SIAF Web サイト「SIAFよもやま話」
<https://siaf.jp/yomoyama/>



1

「あげつく」編集チーム



「あげつく」編集チーム（札幌国際芸術祭事務局 マネージャー）

葛原信太郎 SIAF2024から札幌国際芸術祭に関わる。『新しい芸術祭のつくり方 札幌国際芸術祭 篇』企画・編集を担当。SIAF2024では雪まつり会場などを担当。

松本知佳 SIAF2017から札幌国際芸術祭に関わる。SIAF2024では広報やイベントなどを担当。

細川麻沙美 初回であるSIAF2014から札幌国際芸術祭に関わる。SIAF2024では統括マネージャーとして全体企画の統括、未来劇場などを担当。

トーク内容

- ・『新しい芸術祭のつくり方』通称「あげつく」は、単なるアーカイブ本ではない
- ・文化芸術イベントにおける広報媒体のありかた、SIAFのゴーイングマイウェイスタイル
- ・内向けの目的：引き継ぎ資料／外向けの目的：SIAF2024の記録、その両立
- ・どうやって新しい方々と、新しい芸術祭をつくっていくのか
- ・「地域の行政イベント」と「国際的なアートイベント」のはざま



インタビュー全編はYouTubeでご覧いただけます。
<https://youtu.be/1Fo2BOBJPfI>



Q 「あげつく」が単なるアーカイブ本ではなく、後半が「ハウツー本」のような体裁になっているのはなぜですか？

葛原：中にいると、事務局に携わっている人のバリエーションや、実際に芸術祭を作るときに求められる職種の多様さを強く感じるのですが、外にいるとなかなか分からないところかなと思うんですね。「あげつく」に書いていないこともいっぱいあるんですけど、極力包み隠さず、芸術祭っていうものがどういうふうにできているのか、その構造をなるべく表現したいなと思ってまとめていきました。

僕自身は、編集やライティング、野外フェスの企画や運営を仕事にしている、今回が初めて芸術祭に関わる経験をしました。地方でやる芸術祭は、すごく限られた人の中でやらなきゃいけないと思うんですね。その中で現代美術とか、芸術祭の業界にいる人を探そうと思ったら、たぶん相当無理が生じるはずで。

ということは、もっと芸術祭を開いて、ぜんぜん畑が違う人にも来てもらう必要がある。「あげつく」を読んでもらうと、芸術祭の構造や求められる仕事の多様さが、多少わかるかなと思います。もともと芸術祭をやっている人にも、またこれから芸術祭をやってみたいと思っている人にも、なにか新しい視点を提供できたりすると嬉しいなと個人的には思います。

細川：私が初回の芸術祭に関わったのは、ある程度美術とか現代アート、メディアアートの専門性がある人材として東京から呼ばれたという経緯からでした。ただそれから10年経ったいま、人材の面からも「地域の人たちと一緒にやっていく」ということが非常に重要だと感じています。

開催準備を進める上では、なんでも対応できるイベント会社や広告代理店などの企業と協働することもあるわけですが、まず中の人たちが「なぜこういうことをする必要があるのか」「どう進めたらこれがうまくいくのか」を意識した上で、外の専門家と一緒に働いたり連携を組んだりすることが必要だと思っています。

また、美術などの専門知識と、ターゲットとなる地域で文化芸術を扱うノウハウは大きく違うため、その地域ならではの経験が重要になるように感じていて。この本を見てもらって「これだったら関われるかも」という人が増えていくと、もっといろんなバリエーションというか、おもしろい考え方を取り入れたチームがつかれるかもしれないなと思っています。

松本：私はもともと英語を勉強していて、学校を卒業して在住外国人の方の生活サポート、子どもたちの宿題を手伝う会など、プログラムを企画運営するコーディネーションをやっていました。そういう能力が芸術祭にも転用できる場所があって。もしかしら私たちが思いもよらないような人材が活躍するかもしれない。そういうのも含めて知る、知ってもらえる機会になるといいなと思います。

2

宮井和美さん



宮井和美 (公益財団法人札幌市公園緑化協会 モエレ沼公園 学芸員)

モエレ沼公園の学芸員として、初回であるSIAF2014の計画段階から、10年以上継続してSIAFに関わっている。SIAF2024ではモエレ沼公園会場のキュレーターを務めた。

トーク内容

- ・『新しい芸術祭のつくり方』p44～p51<モエレ沼公園>の内容について
- ・Before SIAF2024: 普段のモエレ沼よりも大きな規模の展示を手探りした10年
- ・At SIAF2024: 「未来の運動会」しかない! / 事務局とタッグを組んで雪倉庫に挑戦
- ・情報をなるべく早めに・多めに・いろんな手段で共有するように工夫
- ・初の冬開催は大成功。雪や冬のユニークな出会いができる場に



インタビュー全編はYouTubeでご覧いただけます。
<https://youtu.be/50SulsPbp50>



Q

モエレ沼公園は市内中心部から距離のある場所にあります。どのような工夫をしていましたか？

今回は初めての冬開催ということで、地下鉄やJRの駅から遠く離れた札幌市郊外にあり、公共交通機関が1時間に1～2本程度のバスしかないモエレ沼公園は、特に雪や天候の影響を大きく受けることが当初から想定されていました。雪や交通の問題は防ぎきれないので、緊急時にいかに安全を確保できるかを事前に考えて、関係者間で情報を共有しておけることが大切かなと思います。あとは勝手に会場側だけで判断しないようにしようとも思っていたので、芸術祭事務局や関係する方々と密に細かく連絡を取ることを心がけていました。

芸術祭の準備では、まだオンラインミーティングが普及していなかった2014、2017は、打ち合わせなどで毎回市内各所を行き来する必要があって、結構大変だったように思います。2020以降は、現地確認以外の多くはオンラインで進められたので、大変助かりました。

市内中心部からモエレ沼公園まで、夏だと車で30分程度ですが、冬になると1時間になったり1時間半になったりするわけですね。来場者に限らず、企画者や参加者、アーティストも来られなくなったらどうしよう、という天候への不安は準備の段階から本番までずっと続きました。

幸い2024は、天候に恵まれ、アーティストが来られないということはありませんでした。芸術祭期間中は土日だけ、中心部の未来劇場からモエレ沼公園まで特設バスを走らせていたのですが、それも全部無事に運行されました。これは奇跡的だったかなと思っています。

特に今回は「未来の札幌の運動会」が、会期の最後に開催だったんですが、運動会の前日に大雪が降ったんです。それを受けて、夜中にもかかわらず関係者・参加者に連絡しました。翌日の天候は大丈夫そうだったので、芸術祭事務局の方や運営チームのみんなに「明日は絶対やります!」と(笑)。でも、参加者のみなさんには「危ないからゆっくり来てください。こちらは1～2時間遅らせてスタートするので、あきらめないで、除雪が終わったらゆっくり来てくださいね」というメールをしました。そうしたら、みんな来てくれました。

当日の進行も、始まってから徐々に人が集まってきても問題ないように、こちらで調整しながら実施しました。運営チームのみなさんも協力してくれたし、芸術祭事務局の人たちも「そういう柔軟な対応でもいいよ」と言ってくれたので、その場での判断が必要な出来事でしたが、いい形になりました。

安全の確保を事前に考えて共有しておくことと、現場で勝手に判断せずに連絡をとること。大雪の日も、夜中でしたが緊急事態として芸術祭事務局の人に連絡して、ちゃんと返信もいただけた。そういう意思疎通を細かくスムーズにできたことで、なんとか無事に開催できたかなと思っています。

3

木ノ下智恵子さん



木ノ下智恵子 (SIAFコミティーメンバー／札幌文化芸術交流センター SCARTS 事業統括ディレクター)

2019年から、SIAF事務局への助言機関であるSIAFコミティーメンバー。2021年から札幌文化芸術交流センター SCARTSの事業統括ディレクターであり、SIAF2024のSCARTS会場のキュレーターを務める。

トーク内容

- ・札幌市民交流プラザ内のアートセンター、札幌文化芸術交流センター SCARTS
- ・Before SIAF2024:SCARTSは2018年オープン、当時から木ノ下さんはSIAFコミティーメンバー
- ・At SIAF2024:企画とチームづくり、コミュニケーション
- ・たくさんの連携先と、どうコミュニケーションを重ねて調整していくか
- ・予想できなかった面白いことを実現するために、好奇心と信頼関係を大事に



インタビュー全編はYouTubeでご覧いただけます。
<https://youtu.be/qpP4hovnTm8>



Q

今回 SCARTS 会場では、多くの外部パートナーと連携していましたが、次回 SIAF に参加するとしたらどのようなことを生かしていきたいですか？

SIAF2024においては、SCARTSは「共創」「コラボレーション」を重視する場として「ビジターセンター」という企画を展開しました。もし他の展示会場と同様に、自分たちでテーマを決めて、展覧会やプロジェクトをキュレーションするとしても、私はきっと今回のように外部の方を巻き込むやり方を採用するのではないかと考えています。

SCARTSは正直、展覧会をおこなう空間としては圧倒的に難しい空間です。壁がなかったり、人が絶えず通り抜けたり、多種多様なイベントが行われていたりします。でもせっかくなら、知恵と創意工夫によって面白いできごとが起こる場所にしていきたい。そのためには、「こういう場所とテーマがあるんだけど、みなさんどうですか」と、今回同様に連携できる外部パートナーとコミュニケーションを重ねて、一緒に新しいものを生み出していくようなやり方で進めていくと思います。

プロジェクトのパートナーに限らず、SIAF2024では、2階にあるSCARTSスタジオで展開した「多目的室」が本当に多目的に使われて、思った以上にアクティブになったり、アイデアや感想を集める体験型の展示にたくさんの人が参加してくれたりしました。そういうことも含めて、いろんな人たちの知恵を借りて、一緒につくっていったほうがいいんじゃないかなと私は思います。

その中で起こりうる問題として、担当者が同時並行で複数のプロジェクトを進めているなか、意図をすり合わせるコミュニケーションが難しく、行き違ってしまうことなどがあります。私はプロジェクトにおける摩擦はつきもので、目標を達成するために言うべきことを言うという点で、遠慮する必要はないと思っています（もちろん人格否定などはNGです）。だからこそ「言っても大丈夫」と思える関係性、信頼関係をどう築いていけるかが大事です。

そのため「定期的に会う」「とりあえず行って直接話してみる」といったことも、プロジェクトにおいてとても大切だと思うんです。たとえばSCARTSと芸術祭事務局は徒歩5分程度のお互いの距離ですが、メール／メッセージベースのやりとりだと、細かい部分が伝わりきらずに意図がずれ違ってしまうこともある。そういう工夫や関係構築をもっと早くからやっておけたらよかった、というのがSIAF2024の反省点のひとつです。

どちらの役割とかじゃなくて、一緒にそこを考えていけるコミュニケーションの機会を持つこと。なんて「タイパ」「コスパ」の悪いことをやってるんだろうかと思うんですけど（笑）。でもやっぱり自分たちだけでは成し得ないような、次元の違うプロジェクトになることを、好奇心を持って面白がれることが大事かなと思います。

4

中村聖司さん



中村聖司（北海道立近代美術館 学芸副館長）

SIAF2014からSIAF2024に至るまで、北海道立近代美術館・三岸好太郎美術館の学芸員として札幌国際芸術祭に携わる。SIAF2024では北海道立近代美術館の展示「1924-2024 FRAGILE [こわれもの注意]」キュレーションを担当。

トーク内容

- 大きなインパクトがあった2014、大友良英と三岸好太郎が交わった2017
- 2020、吹き抜ける大きな空間に入るべき「麒麟や象」は……むかわ竜！
- なにか新しいことができないか？「章立て」を崩すことに挑んだ2024
- 現代作家とコレクション、展示計画を何度も何度も書き直し、初めて30枚書いた
- 芸術祭のあり方の議論は市民から／コレクション＝地元の資産を活かす



インタビュー全編はYouTubeでご覧いただけます。
<https://youtu.be/ureqP6vQYV8>



Q

2014から2024まで関わってきて感じる、
 普段の美術館と芸術祭の共通点・違いについて教えてください。

私はいまの札幌国際芸術祭は、美術館とかなり近い取り組みを行っているのではないかなと思っています。美術館には大きく4つの機能があります。「調査研究をおこなう」、「展示をおこなう」、作品を「収集して保管する」、そして「教育普及をおこなう」というものです。

札幌国際芸術祭は、特に回を重ねるごとに「教育普及」的な視点をとても明確にして、内容に反映されているんじゃないかなと感じていますね。2014は、近代美術館や芸術の森、モエレ沼公園などが中心でしたが、教育普及的なイベントというよりは、まさに現代美術の展覧会という感じでした。それが2017、2020と重なっていくうちに、どのようにして芸術に対する理解、芸術祭への理解を深めてもらうか、そしてそれをどのように盛り上げていくか、という視点が明らかに打ち出されていくような印象を受けていました。

2020は近代美術館のコレクションを使いながら、ディレクターの天野太郎さんが考えていることにどう寄り添っていくかを考えていました。特に、会場の中に非常に大きな吹き抜けの部屋があり、そこに何を展示するのが大変気になっていました。いろいろ考えた結果、ギリギリのタイミングで、当時北海道内で発見されて話題になっていた恐竜「むかわ竜」の化石を出せないかと提案し、計画が進みました。残念ながら2020自体がコロナ禍で中止になってしまいましたが。

2024は、「むかわ竜」に代わる目玉のような展示物を見つけれられるだろうか、というのが、実はコンセプト以前に大変悩んだところでした。全体の企画については、私はもう何十年も展覧会をやっているのですが、大体の展覧会は「章立て」になるんですよね。第1章、第2章……となり、その章を説明する作品が並んでくる。なにかそれとは違う形でやれないかと思っていました。そこであまりがっちりとした枠組を構成せず、曖昧で違和感があるようなキーワードを出していった、腑に落ちるというよりむしろ疑問を喚起する、という感じを目指して取り組みました。

そうした展覧会や展示は、芸術祭でも美術館でも一般のお客さんに一番期待されているところですし、ボランティアやコミュニケーションなども含めた、芸術祭が持つ「教育普及」の要素も、美術館の機能と方向性が重なっています。近代美術館がこれからも、地域の資産であるコレクションを積極的に生かして、芸術祭に関わってほしいと考えています。

5

坂本真惟さん・佐藤康平さん



坂本真惟（公益財団法人札幌市芸術文化財団 札幌芸術の森美術館 学芸員）

佐藤康平（公益財団法人札幌市芸術文化財団 札幌文化芸術交流センター SCARTS）

坂本はSIAF2017から、佐藤はSIAF2020から、札幌芸術の森美術館の学芸員として札幌国際芸術祭に携わる。SIAF2024では「メディアアーツの森」と題し、同美術館で2つの展示企画を担当。

トーク内容

- ・ 学生として見ていた2014、部活感のあった2017、ボリュームがあった2020
- ・ 2021年からの「SIAF ふむふむシリーズ」などで、関係性が近づいた2024
- ・ 2020からメディアアートを軸に、かつ市民の方が親しみを持てる企画を検討
- ・ 過去に制作されたものを、いまの時代に合う形でどうやって展示するのか
- ・ 芸術の森は「遠い」からこそ、札幌の「都市と自然」や地域性を感じられる



インタビュー全編はYouTubeでご覧いただけます。
<https://youtu.be/S51x7p6M0TQ>



Q

SIAF2024の展示企画を進めるにあたって、
 どのようなことを考えて方向性を決めていったのですか？

佐藤：大きな方向性として、2020でも検討していた方向性であるメディアアートを軸に、かつ市民の方々にも親しみが持てるものを、という2点を考えて進めていきました。

SIAF2020では、ディレクターのひとりであったアグニエシュカ・クビツカ=ジェドシェツカさんとの企画の中で、札幌市が加盟する創造都市ネットワーク「メディアアーツ分野」を軸に、メディアアートを中心とした展開をしようという意図がありました。それを引き継ぎつつも、2014、2017と「現代アート」や「メディアアート」というものが、一般的な札幌市民の方々に果たしてどこまで浸透できたのか、という反省もありました。それを踏まえて、市民の方が親しみを持てる、来場するきっかけが生まれやすい作品を展示して、多くの方々に来ていただくことが大事だと考えていました。そうした2つの軸を両立させられるものとして、日本のメディアアートの第一人者でもあり、親しみやすいおもちゃの開発などもされている、明和電機の名前が挙がりました。

坂本：2つの展示のひとつ、明和電機の「ナンセンスマシン展」では、明和電機の4つのシリーズの展示をおこないました。ここで意識したのは、なるべく制作当時の姿で展示することでした。明和電機のおタマトーンや電動楽器は、ユーモアのある印象が強いと思うんですけども、こうして4つのシリーズを展覧会として見ていくと、作品を作る根底に「なぜ自分が生きているのか」「自分とは何なのか」というシリアスな問いが常にあることがわかります。そこを伝えられるように、作品はなるべく当時の状況で展示したいと思っていました。

明和電機が20代で制作した最初のシリーズ「魚器（NAKI）シリーズ」というものがあるんですが、明和電機のキャッチーさからは想像できないような、「生と死」というテーマを扱っています。その中でも《ウケテル》という作品は、水盤の上に針がいくつも取り付けられていて、その水盤には金魚がいて、そばにある電話で117の時報に電話をかけると針が落ちて、運が悪ければ魚に当たってしまう、という作品でした。それによって、鑑賞者が金魚の運命を握っている、その残酷さに向き合うという作品です。

ですがやっぱりいまの時代だと、動物の倫理など多くの配慮が必要になるので、これをどこまで当時の形で展示するか、というのは事務局の方々も含めて話し合いました。その結果、金魚は入れて展示するが、時報や針が落ちる仕掛けは使わず、金魚の環境もしっかりと整える、という形で展示することになりました。そういう作品ひとつひとつを、どうやって展示までこぎつけるか話し合って開催を迎えました。

6

草野竹史さん・東 輝さん



草野竹史 (NPO法人 ezorock 代表理事)

東 輝 (NPO法人 ezorock 総務担当)

2001年、ロックフェスティバルの環境対策ボランティア団体としてezorockを設立。2013年に法人化。SIAFには2019年からボランティアのコーディネート事務局として関わる。SIAF2024では「ふむふむプロジェクト」として、ふむふむサポーター・ふむふむガイドの運営事務局を立ち上げ運営。

トーク内容

- ・ 市民参加を意識して、ボランティアの役割をはっきり位置づけているSIAF
- ・ 現代アートは関係ない分野だと思っていたが、多くの共通点を見出した2019
- ・ コンスタントに活動希望者が集まり続けることは想像していなかった
- ・ ガッツリ研修があるふむふむガイドの希望者が多かったことへの驚き
- ・ ふむふむサポーターは「作り手」としてお祭りに参加できる隙間



インタビュー全編はYouTubeでご覧いただけます。
<https://youtu.be/oGmoHzX3Pm4>



Q SIAFに関わり始めたのはどういうきっかけでしたか？

草野：SIAFのことは初回から知っていました。理由として、初回からボランティアを導入したいという話はいただいていたからなのですが、そもそも夏はロックフェスの現場が忙しかったのでお断りしていました。その後、冬開催になるあたりで改めてお声がけをいただきました。ボランティアの参加の仕組みをつくることは確かに好きなのですが、アートが全然わからなかったもので、一番最初に話し始めた2019年ごろに、事務局の方に「現代アートって何なんですか？」っていうのを2時間くらい質問し続ける日があったんです。

一緒にやらせてもらいたいんですけど、「なにを大事にしているんですか？」とか「どういうところに意味があるんですか？」ということが理解できないと絶対無理だな、と思ったので。それに対してもうひたすら打ち返していただいて、「あ、実は現代アートと自分たちがやっていることってそんなに遠くないんだ」と接点や共通点がいっぱい見えてきました。

そこから、この大きな動きに自分たちが参加させていただけることを、むしろ大事にしたいと感じて、団体の中でも価値観が変わっていきました。関わり始めた初期の頃に、そのあたりをしっかりお話する機会を設けていただいたことはとても大きかったですね。

Q SIAFのボランティア活動を運営する中で、どういことを大切にしていましたか？

東：基本的にezorockのボランティアは10～30代くらいの方が中心なのですが、「いろいろな方とにかく参加していただきたい」ということで、SIAFではもうちょっと年配の方、50代から70代くらいまで年代を広げました。説明会をオンラインで実施したんですが、どうしてもオンライン環境がない方もいらっしやったので、ezorockの事務所で説明会に参加していただいで対応しました。

ボランティアで参加する方はいろいろな目的で来られているので、「いろいろな価値観が混ざる」というところはSIAFのボランティアも普段のezorockの活動と同じでした。その価値観の幅が普段の活動よりは割と広く、そして年齢層も普段より幅がある、というのは大きな違いでした。

草野：SIAFのボランティアは「アートが好きそうな方々」が多くなるのかと思いきや、蓋を開けてみると、集まっている人たちが幅広くて、雰囲気や会話の内容、価値観が非常に多様でした。そこで作品を通して、ボランティア同士でお互いの価値観を重ね合わせるような機会が生まれていました。価値観の幅広さによって、他の人と交流する楽しさが色濃く出たんじゃないかなと思いますね。

7

端 聡さん・吉崎元章さん



端 聡 (アーティスト・CAI03主宰)

SIAF2014では地域ディレクター、SIAF2017では企画メンバーおよび参加アーティストとして関わる。SIAF2024では主宰するCAI03が公募プロジェクト会場として参加。

吉崎元章 (SIAFコミッティーメンバー／公益財団法人札幌市芸術文化財団 本郷新記念札幌彫刻美術館 館長)

2015年からSIAFコミッティーメンバー。公益財団法人札幌市芸術文化財団の学芸員として札幌のアートを俯瞰する中で、SIAFの考察を続けている。

トーク内容

- ・ SIAF2014に対する地域のリアルな反応・状況
- ・ 北海道・札幌の独自性、地域性
- ・ 札幌の黎明期のアートシーンからSIAF2014までの背景
- ・ 2013年11月のプレイベントを振り返る～ローカルとプロビシナル～
- ・ 地域のアーティストに求められていたSIAF2014のイメージ
- ・ 国際展とは何か？国際芸術祭の必要性、開催までの綿密な戦略
- ・ SIAFの地域への刺激・影響、そしてこれから



インタビュー全編はYouTubeでご覧いただけます。
https://youtu.be/jsBZ_2DrDQ



Q

SIAF2014に求められていたもの、イメージとは？

吉崎：初回の芸術祭に対して個々にイメージしてるものが違っていたと思います。多くの北海道のアーティストは、この地の美術の集大成的な展示を行い、国際的に発信をして道外の人に見てもらう機会と捉えていたような気がします。でも、芸術祭では、北海道・札幌の歴史を踏まえて、この地に根差す我々がどうすべきなのかということをアートを通じて考えていくことが大きなテーマでした。そのため、初回に様々なスキル・ノウハウを持った道外の人たちが集結したことは非常に重要なことでした。加えて、札幌のアートイベントに日本中からアート関係者と美術記者、それからアート愛好者がやってくるなど今までありませんでした。その足掛かりとなったことは非常に大きかったと思っています。

端：やっぱり多くの地元の美術家は、現代美術を中心に紹介する国際美術展だと思っていたでしょう。ですが私は、ユネスコ創造都市ネットワークのメディアアーツ都市となった札幌で開催される芸術祭は、単なる国際美術展ではなく、新たな考え方をアートで試していくことを、本来の目的とするべきだと捉えていました。

その捉え方の背景には、芸術祭の実現には、行政や国との協働が必須だったということがあります。札幌では70年代から90年代くらいまで、多くのアーティストがいろんなグループ展を通して、国際展を目指して運動していました。私も先人の背中を見てきましたが、そうした運動は民間に限られた話で、先人たちはその意識を行政や国に訴えかけるプレゼンテーションを多くはしてきませんでした。ですが、芸術祭の実現のためには、行政の中へ飛び込んで、国際芸術祭の必要性というものを訴えかけない限り、実現できないことが分かってきたんですね。

さまざまな地域で“まちづくり”と“ツーリズム”を一緒に考えるムーブメントが起きていた15年ほど前に、私たちは札幌を観光地としてさらに活性化するために、札幌市にアートツーリズムを提案しました。その構想の中で、国際芸術祭を立ち上げて、新しい産業として展開し、さらにそこにユネスコのネットワークを紐づけていくことを提案していました。モエレ沼公園のグランドオープンという世界的なトピックもこの時期です。

そういった構想が芸術祭実現への足掛かりになり、色々な施策に時間をかけて取り組んできました。

8

マユンキキさん



マユンキキ（アイヌの伝統歌を歌う「マレウレウ」メンバー／アーティスト）

SIAF2017では大友良英ディレクターのもと、企画メンバーとして複数のプログラムを実現する。SIAF2020以降は、アイヌ文化コーディネーターとして、SIAFのアイヌ語公式名称、アイヌ語テーマを考案、アーティストへの専門的なアドバイスを行う。また、アーティスト・ミュージシャンとしても参加している。

トーク内容

- ・ 2014：オープニングに実施されたカムイノミと小書き片仮名事件
- ・ 2017：記者会見のワークショップを皮切りに企画メンバーとして複数のプロジェクトを実現
- ・ 2020：「国際」も「芸術」も「祭り」も単語にはないアイヌ語でのSIAFの正式名称
- ・ 2024：LAST SNOWから派生したアイヌ語サブテーマとアーティストとしての関わり



インタビュー全編はYouTubeでご覧いただけます。
<https://youtu.be/3aLQb5jLp60>



札幌国際芸術祭のアイヌ語名称はどのように作られましたか？

札幌国際芸術祭をアイヌ語に訳す時に考えたのは、アイヌ語にはもともと「国際」も「芸術」も「祭り」もないので、どう訳すべきかということでした。ですが工夫すれば表現できないことはない。今回の場合は「いろいろな国から技能のある人が集まる」というように芸術祭を捉え、アイヌ語では「Usa Mosir un Askay utar Sapporo otta Uekarpa」と表現しました。でも、本当は毎回考え直していきたいぐらいに思っているんです。その年によってテーマも違いますから、その都度変えていけたらなと思っています。

SIAFは初回からアイヌに関するプログラムがあって、2014ではカムイノミや、「北の大地をこほぐ」というアイヌ舞踊を取り入れたプログラム（これは中止になってしまったけど）がありました。2017からは私が関わることになり、「アイヌ」に関することを意識的に扱うのではなく、ナチュラルに要素として入っていると感じています。ですので、2020からテーマとタイトルのアイヌ語表記が行われるようになるのは自然な流れだったと思っています。



これまでの海外での経験を踏まえて、先住民やその文化との関わりについて、アドバイスがあれば教えてください。

日本以外の国で、非先住民のアーティストが先住民やその文化を作品の中で扱いたいとなると、非先住民であるという当事者性にしっかり向き合っていたり、自分が踏み込めない領域があることを理解していることが多いように思いました。一方、日本でアイヌに関することを扱いたいという相談を受ける際には、こういった意識が希薄のように感じます。日本では自分の当事者性についてを深く考えるきっかけがなかなか無いからかもしれません。

これからも色々な人がSIAFに関わっていくだろうし、アイヌに興味を持たれることも増えると思うのですが、その際には歴史認識として「自分の属性」については意識する必要があると思います。現状、SIAFでは私がアイヌ文化アドバイザーとして関わっているので、そういったことを必ず話し合っているのですが、本当は私がいなくても、多くの人がきちんとした認識を持って、他者の文化に触れられるようになるのではないかと思います。面倒くさがらず、そういう話を丁寧にしていくしかないというのはありますね。

9

丸田知明さん



丸田知明（丸田知明建築設計事務所）

愛知県と北海道を拠点とする一級建築士。個人住宅、店舗、クリニックなどの設計・監理のほか、美術館や展覧会の会場構成、しつらえなども手がける。SIAFや国際芸術祭あいちでは、主催事務局に所属するアーキテクトとして活動し、SIAFには2017年開催から参加。

トーク内容

- SIAFには芸術祭専属のアーキテクト（建築家）がいる
- 作品展示を施工・法規面で支え、裏方調整を担う存在
- 会場設営や海外作家の要望対応など、多面的に活躍
- SIAF2024では、雪など環境条件を踏まえたサイン計画も担当
- 芸術祭の廃棄物削減に向けた取り組みは、今後の課題のひとつ



インタビュー全編はYouTubeでご覧いただけます。
<https://youtu.be/MYJjz4pau7w>



Q

芸術祭におけるアーキテクト（建築家）の役割とは？

僕が「アーキテクト」として芸術祭に関わるようになったきっかけは、あいちトリエンナーレ（現・国際芸術祭あいち）2016でした。すでにあいちでアーキテクトを務めていた、建築家の武藤隆さんにお声がけいただいたんです。

アーキテクトが芸術祭の主催事務局に所属しているというのは、あまりピンとこないかもしれませんがね。その道を切り開いたのは、前述の武藤さんであり、比較的新しいポジションかと思います。簡単に言うと、芸術祭に必要なあれこれの「施工面」を取りまとめる役目を担っています（SIAFと国際芸術祭あいちでは、求められている役割がそれなりに違うのですが）。SIAFには2017年から携わって、2020、2024と続けて参加しています。

やることは多岐にわたります。作品ごとに施工方法を考えるのはもちろん、会場の入り口やお客さんが歩く動線まで気を配ります。それをスムーズに実現するためにスケジュールを組んだり、消防法や建築基準法などの法律もきっちりクリアしていく。海外作家が「この素材を使いたい」と言っても、それが日本で手に入らないこともあるので、代わりになる材料を探したりもします。

芸術祭ならではの仕事といえば、会場間や最寄り駅などをつなぐ「サイン（標識）」の設置です。芸術祭は一度に複数の会場で展開されることが多く、それぞれの会場案内の施工を考えるのもアーキテクトの役割です。民間のアートイベントとは異なる手続きも必要になるので、アーキテクトが内部でそのフォローをしています。

武藤さんからは「裏方に徹しなさい」とアドバイスをもらいました。建築家としての自己主張よりも、とにかく裏から全体をうまく回していくことが大事だ、と。芸術祭が大規模になればなるほど、アーティストや関わる業者さん、職人さん、デザイナーさんなど関係者は増えて複雑になります。その中で、みんなが気持ちよく動ける環境づくりを心がけています。

今後は、芸術祭で出る廃棄物の削減も重要になってきます。どんな資材を使うか、それは再利用できるか。これらの工夫ができればと環境面だけでなく、予算面でも有利になります。特に地方の芸術祭だと予算は限られがちなので、こういった取り組みはますます欠かせません。

アーティストや芸術祭が求めるものは常に変わり続けます。そこがアーキテクトをやっていて面白いところ。できる限り日本中の展示会を見に行き、最新の施工技術や素材をチェックし、日々の仕事に生かしています。

10

片岡 泰さん



片岡 泰（札幌国際芸術祭実行委員会 事務局長）

民間企業を経て、1995年札幌市役所に入庁。障がい福祉、人事、病院、教育、産業振興などの部署での勤務を経て、2021年4月から現職。

トーク内容

- ・ 札幌国際芸術祭を司る「事業課」と「総務課」、最大14人ほどの市役所職員
- ・ 行政の中ではほとんどない「3年に1回」というイベントの難しさ
- ・ 専門知識が必要な中で、市役所職員として得られる貴重な経験
- ・ 札幌市長とともにオーストリア・リンツで見た、クリエイティブな生態系
- ・ 札幌市が行政として、アートを通じて新しい価値を見出していくために



インタビュー全編はYouTubeでご覧いただけます。
<https://youtu.be/KojuYwbJgYk>



Q 札幌国際芸術祭で、市役所の人はどんな仕事をしているのでしょうか？

芸術祭の開催年には最大14人ほどの市役所職員と、そして同数ほどの外部スタッフの方が関わっています。その中で市役所職員の所属は大きく「総務課」と「事業課」に分かれていて、総務課は予算の調整や部署の庶務といった仕事、事業課は芸術祭の具体的な制作に関わる仕事をしています。

市役所職員はおよそ3～6年ほどのスパンで異動になります。そのため、芸術祭事務局に来た職員は、基本的にはアートの基礎知識がない状態からスタートします。そういった状況の中で芸術祭に関わっていくということは、たくさんのハードルを経験することになり本当に大変ですが、外部スタッフのみなさんとともに作り上げていきます。世界的に活躍するアーティストやスタッフとの協働で、見慣れた市内に国際的で大規模な展覧会をつくり上げるというのは、めったにない経験ですよ。

Q 札幌国際芸術祭は、今後どのような発展があると思いますか？

これまでの札幌国際芸術祭の延長線上に、アートを通じて社会にいい刺激を与える機会を生み出すことを考えていけたらいいのかなと思っています。

札幌国際芸術祭は2012年に札幌市が定めた「札幌国際芸術祭（仮称）基本構想」をベースに実施されていますが、芸術祭を継続する前に構想されたにもかかわらず、とても先読みされた内容だなと思っています。いわゆる「アートのフェスティバル」だけじゃないことを網羅していて、初回からの10年間でさまざまなことが変化する中でも、基本構想からは逸脱していない。まずそこがすごいことだなと思います。

個人的には、2024年9月にSIAF2024ディレクターの小川秀明さんの拠点であるオーストリア・リンツ市に秋元札幌市長と一緒に訪問した際に、アートを起点にしたスタートアップのハブとなる施設「tabakfabrik（タバコファブリック）」が、完全に生態系として成立していたのが印象的でした。200を超えるスタートアップが巨大な工場跡に入居していて、都市の若さやエネルギーになっている。こういう先駆的でクリエイティブな社会実装があるんだ、というのを目の当たりにしました。

もちろんただ真似すればいいというものでもないですし、僕の中でも完全に咀嚼できているわけではありません。ですがアートと社会がどう接合していくか、アートを通じてどうやってまちづくりに革新的な刺激を与えていくか、いろいろな形を参考にしながら、札幌ならではのあり方を、これからみんなで議論していけたら面白いかなと思っています。

11 工藤“ワビ”良平さん・白井宏昭さん



工藤“ワビ”良平

中西“サビ”一志と共にデザインユニット「ワビサビ」として活動するアートディレクター、グラフィックデザイナー。SIAF2017では公募プロジェクト「札幌デザイン開拓使」を企画。SIAF2020・2024ではアートディレクションを担当。

白井宏昭

札幌を拠点とするフリーランスグラフィックデザイナー。SIAFには初回からデザイナーとして関わり、広告媒体や会場サイン、書籍など多岐にわたる制作物を手がける。

トーク内容

- アートディレクターとデザイナーの関係は「現場監督と職人」
- 「巻き込まれた」「客観的にみていた」2014。デザイン界の重鎮登場、課題も見えた2017
- 2020の難解なテーマを瞬間的に表現するコミュニケーションマーク
- 2024のシンボルマーク・雪の結晶のルーツは2014にあり？
- SIAFのポジションは「展覧会」よりも、市民に寄り添った「イベント」であるべき
- 最先端をみせる芸術祭には、それを受けとめる成熟したデザインを



インタビュー全編はYouTubeでご覧いただけます。
<https://youtu.be/GM6-mxg78Ks>



Q アートディレクター(AD)とデザイナー(D)の役割とは？

工藤：アートディレクターとデザイナーの関係って、現場監督と職人みたいなものなんです。現場監督は「塀を立てる」ことはしないけど、「どんな塀を建てるか」はきっちりと職人に伝えて、それが立ち上がるまで管理しなきゃいけない。例えば「ここちょっと床が低くて上手いかない…」っていうときに、現場監督はそれをどう解決するかを考えて、職人がスムーズに遂行できるようにする。それがADとDの関係なんじゃないかなと思います。

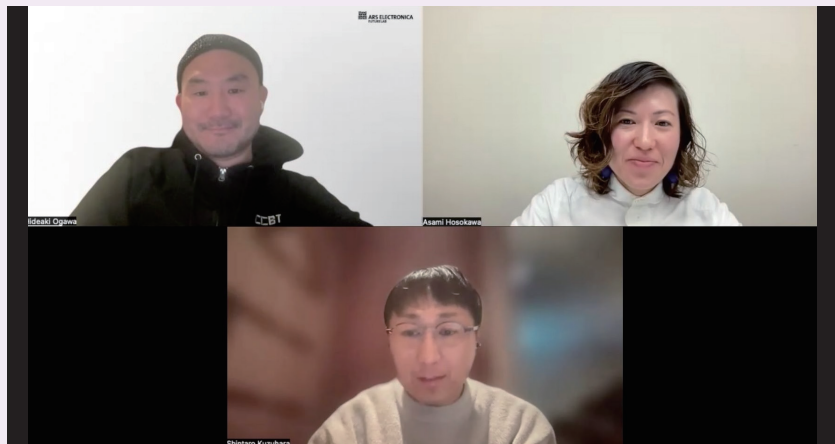
Q SIAF2024でお二人はどのように協働されましたか？

工藤：僕は現場監督のくせに職人のやることに手を出しちゃうタイプ。白井さんもADも務められる方なので「ADとD」というよりは「AD&Dの二人」で組み上げていきました。ポスターは最初、手分けして案を出したのですが、白井さんがクールな雪の結晶の案をつくってくれた。そこに、ディレクターの小川秀明さんが所属するアルスエレクトロニカで活躍している〇さんというイラストレーションを起用しました。

SIAFは限られた人だけではなくて、広く札幌市民に見ていただきたいということを特に意識されていると思います。それを踏まえて、冬開催の芸術祭を象徴する雪の結晶と、親近感のある〇さんを同居させちゃうという方法を、2024のビジュアルとして採用しました。2つを同居させないほうが、デザイン的にはシンプルだし、すっきり見える。でも僕は合体させていいと思って。僕の中でも新鮮でたし、上手いっとなと思っています。

白井：なんで雪の結晶だったのかというと、実はSIAF2014で北海道立近代美術館に展示されていた、中谷宇吉郎さんの雪の記録写真が頭に残っていたんです。2024のテーマが「LAST SNOW」ということを聞いて、さらに小川さんから中谷さんについて言及があったりして。そこでピンとつながって、雪の結晶を大きく使うのがいいんじゃないかなと思いました。

そこで、中谷宇吉郎さんゆかりの北海道大学 低温科学研究所から画像を提供していただけないか、というところから古川義純さん（中谷宇吉郎 雪の科学館 館長）とつながりました。写真をたくさん見せていただいたのですが、解像度などデザイン展開に関して難しいところがあったので、3Dでオリジナルの雪の結晶をつくるのはどうだろうと。それで有限会社ノチウ（札幌市に拠点を置く3Dグラフィック制作会社）の佐藤 敦さんに相談したら「結構いいところまでできますよ」と回答をいただき、やることになりました。さらにCMも制作することになったので、雪の結晶ができる過程の映像も制作していただき、展開するにはとても便利なものになりました。



小川秀明 (札幌国際芸術祭2024 ディレクター／アルスエレクトロニカ・フューチャーラボ 芸術監督)

SIAF2024ディレクター。オーストリア・リンツ市にあるアルスエレクトロニカにて、アーティスト、キュレーター、リサーチャーとして活躍。現在は、同機関の研究開発部門であるアルスエレクトロニカ・フューチャーラボの芸術監督・マネージングディレクターを務める。

細川麻沙美 (札幌国際芸術祭事務局 統括マネージャー)

SIAF事務局統括マネージャー。SIAFには初回の2014年から事務局に所属。テレビ局での展覧会制作・運営を経て、2008年から、企画・展示業務を中心にさまざまな展覧会などに従事。

トーク内容

- ・ 創造的“衝突”の不十分さがSIAF2024の心残り
- ・ SIAFの国際性は、回を重ねるごとにアップデートしてきた
- ・ ヨーロッパとアジア、芸術祭における国際性とは
- ・ 「独自性」こそ国際性を引き出す鍵
- ・ 既存の国際ネットワークを活用できるのでは



インタビュー全編はYouTubeでご覧いただけます。
https://youtu.be/9mBTI_jK90A



Q

国際芸術祭の「国際性」とは？

小川：私が住むヨーロッパは戦争を繰り返してきた歴史的背景があります。芸術はその反動として、対立を乗り越え人々をつなぐ役割を持っているようにも思えます。ヨーロッパの芸術祭が、より良い未来をつくるためのプラットフォームであり国際的であることは、ある意味自然な流れだと感じます。

SIAF2024でも、国際色豊かなアーティストを呼んで、普段の札幌じゃなかなか知ることのない視点や価値観を市民の皆さんに届けました。でも正直、もっと踏み込みたかった。国際性豊かなアーティスト同士、またはアーティストと市民が出会い、対話し、新しい何かを生み出す。そんな『クリエイティブな衝突』を起こしたかったけど、やり切れなかったのが心残りでしたね。

これからのSIAFがより国際的になるには、その独自性をとことん突き詰めることが大事だと思います。借り物じゃなくてその芸術祭「らしさ」の積み上げが世界中のアーティストや参加者への魅力になる。その受け皿としての事務局の体制や戦略、仕組みを設計することも同時に大切になるでしょう。

細川：芸術祭の『国際性』はいろいろな面があると思うんです。例えば、SIAF2014、2017では、世界的に活躍するゲストディレクターを迎えて国際的な視点でキュレーションを実施。それに加えてSIAF2020では、ディレクターチームのお一人に母語が日本語ではなく、事務局との共通言語が英語となる方を迎え、事務局の体制自体に国際性を意識し、即時的な英語の発信に繋がっていきます。SIAF2024ではオーストリア在住の日本人の小川さんを迎えることで、ヨーロッパのネットワークと繋がりがながらも、日本語でのやりとりという意味疎通しやすさの両立を実現。こうして開催のたびに「国際性」に対しては課題意識を持って、アップデートしてきたんです。

最近訪れた韓国の光州ビエンナーレや釜山ビエンナーレでは、国際的な存在感を高めようという明確な意思を感じました。一方で、市民向けガイドツアーを積極的に行うなど、国際的な芸術の潮流を生活者に浸透させる工夫もありました。

世界中からアーティストが参加していたら国際的なのか、来場者がいろんな背景を持っていたら国際的なのか、考え方はいろいろです。今後は、SIAFでは『ユネスコ創造都市ネットワーク』や『冬の都市市長会』など、札幌市が加盟している国際的ネットワークとの連携を強めていくということも可能だと思います。今回の収録をきっかけに、SIAFの国際性について、これからも考え続けたいですね。

13

漆 崇博さん



漆 崇博（札幌国際芸術祭事務局 マネージャー／一般社団法人AISプランニング 代表理事）

北海道内でのアーティスト・イン・スクール事業をはじめとした、アートと社会をつなぐ担い手として活動。また、SIAF2014から札幌国際芸術祭に関わり、SIAF2024では札幌国際芸術祭事務局 マネージャーとして、SIAFスクール事業を担当。

トーク内容

- ・ SIAF2014を通じて、札幌のことをなにも知らないと思った
- ・ 2015年から始まった、札幌を捉え直す取り組みとしての「SIAF ラボ」
- ・ 坂本龍一さんも注目していた、活動と一緒につくる場としての「札幌市資料館（旧札幌控訴院）」
- ・ SIAF2024に向けた小川さんの構想を押し広げた「SIAF スクール」
- ・ 子どもたちや鑑賞者が、創造的で主体的に関わるための仕組みづくりを



インタビュー全編はYouTubeでご覧いただけます。
<https://youtu.be/4yCndQ9LEjU>



Q 「芸術祭自体が教育・学びの場になる」ということを、どのように捉えていますか？

「人材育成」や「教育普及」といったことを、もうすこし拡張して捉えていきたいと思っています。我々からなにかを教えとか、伝えるとか、一方通行ではない学びの場にしていきたい。そこに関わった人たちが、より創造的に、主体的に関わっていけるような仕組みにしていきたいなど。

私はこれまで、「アートと社会をどうつなぐか」というコーディネーション、特に学校や地域とアーティストをつないでいく活動を20年くらいやってきました。2012年にSIAFに声をかけていただいたときも「そういう活動をSIAFでもするのか」と思ってたんですが、自分のやってきたことをそのままやるということは、実はSIAF2020まではあまりしていませんでした。

そんな中、SIAF2024に向けて小川さんがディレクターになり、大きな構想の中に「SIAF スクール」「アーティスト・イン・スクール」という言葉が入っていて。それで小川さんとスクールの話を詰めていったときに、すごく腑に落ちたのが「SIAF 自体が学びの場になる」という言葉でした。それなら、いままでSIAFで資料館をベースにやってきたことや、自分がアーティスト・イン・スクール事業でやってきたようなことを、もうすこし集約して「SIAF スクール」の中でいろいろ展開できそうだな、と思ったんです。

SIAF2024で印象的だったことがあります。SIAFスクールで実施した「出前授業」を通して、子どもたちがつくった雪の結晶の画像がアーティストによって作品化されて、未来劇場で紹介されました。そして、そこに参画してくれた学校の子どもたちを招待する、という取り組みを行いました。面白かったのが、招待で未来劇場に来てくれた子どもたちが、今度は週末に保護者の方たちや友達を連れて、自主的に鑑賞ガイドをしてくれていたことです。未来劇場で配布した会場マップは、小学生でも読めるようなものになっていたこともあり、子どもたちがそれを持ってお父さんお母さん、おじいちゃんおばあちゃんに説明をしている風景が結構見られたんですよ。

もちろん「そうならいいな」と思っていたけど、子どもたちが主体的に「もう1回行きたい」とか「自分の作品を見てほしい」と感じて、会場で「この作品がこうなんだよ」と自分の作品以外のことをどんどん伝えているのが、すごく印象的でした。そういう創造的で主体的に関わるための仕組みづくりが、SIAFスクールとしてはもっとできるのかなという気がして、それをSIAF2024で試せたので、さらに発展・拡張していくといいなと思っています。

14

宿院卓馬さん・河村佳祐さん



宿院卓馬 (パノラマティクス プロデューサー)

河村佳祐 (パノラマティクス リサーチャー)

2006年 株式会社ライゾマティクス設立。メディアアート、広告、エンターテインメント、建築・都市開発などの領域で活動。2020年の組織変更で、社内の3部門のひとつ「アーキテクチャー部門」を「パノラマティクス」へと改める。SIAF2024では、パノラマティクスはイニシアティブ・パートナーとして、さっぽろ雪まつり 大通2丁目会場と札幌文化芸術交流センター SCARTS (一部) における展示構成・制作を担当。宿院・河村はともに北海道出身。

トーク内容

- ・札幌と東京、アートプロジェクトを通じた関わり方
- ・「期間限定Uターン」というかたちでの地域との接続
- ・「コンピテンシー」と「やりがい搾取」
- ・「MIND TRAIL」での経験と札幌での応用
- ・「哲学」を共有できるか否か



インタビュー全編はYouTubeでご覧いただけます。
<https://youtu.be/o8zPEXS4Ehc>



芸術祭の担い手たちはどこにいるか？

宿院：SIAFにはずっと関心を持っていました。というのも、今となっては東京の生活が長いのですが、生まれも育ちも札幌なんです。SIAF2024では2つの会場に関わり、私と河村もほぼ1か月札幌に滞在しました。いわば「期間限定Uターン人材」として、SIAFに関わることができた。外の視点がありつつも札幌への愛もある、「その地域出身で、都市圏でさまざまな経験を積んだ人」というのは地方芸術祭においていろいろと関わりしろがあるのではないかと思います。

大学進学で上京した自分にとっては、札幌で飲み歩くという経験があまりなく、今回の札幌滞在は地元の新たな魅力の発見にもなりました。そういった場所で自分の仕事の話をすると「展示を見てきたよ」「こんな企画があったら面白いかも」という会話が生まれ、地域の人たちが芸術祭に対して自然に興味を持つ瞬間を目の当たりにしました。そうした日常の何気ない対話も、芸術祭を地域に根付かせる上で重要なのではないかと思います。「期間限定Uターン」として「札幌」と「東京」をつなぐ役割が、一時的なものではなく継続的に続けられるといいなと思っています。

河村：私たちはさまざまな場所で、市民がその地域の未来について意見を出す場をつくっているのですが、SIAF2024では札幌市民からの声が400以上集まったんです。これだけ多くの回答数を得たことはこれまでの経験上なく、それだけ市民が札幌の未来について言いたいことがあるという意味で、札幌の未来に可能性を感じました。

とはいえ「仲間集め」はとても難しいとも感じています。パノラマティクスはさまざまな芸術祭に関わっていますが、その経験から言えば、芸術祭が目指しているものを一緒に目指せる、哲学を共有できるような人と一緒に作っていくことが大事だと思います。決して、一朝一夕ではできません。

例えば、パノラマティクス主宰の齋藤精一がプロデューサーとなり開催していた奈良県の奥大和の芸術祭「MIND TRAIL」では、アーティストが「こんな作品をつくりたいんです」といった翌日に、地元の職人さんがその骨組みを完成させていたということがあったんです。「若い人がたくさん来てくれるなら、頑張るか」なんて言って。ただの発注・受注関係ではなく、アーティストと地元の人が、それぞれの得意なものを持ち寄るような関係を時間をかけて築くこと、芸術祭の目的を共有すること。市民と一緒に芸術祭をつくるという点においては、そんなことが大事のように思います。

15 連携プロジェクト「みんなでウパシテ!!」



収録にご参加いただいた7組8名のみなさま (五十音順)

赤坂文音 (札幌駅前通まちづくり株式会社)	来嶋路子 (MAYA MAXX_Luce)
今村育子 (札幌駅前通まちづくり株式会社)	趙 領逸 (北海道科学大学 未来デザイン学部 メディアデザイン学科 教授)
梅村尚幸 (本郷新記念札幌彫刻美術館 学芸員)	沼山良明 (NMA 主宰)
小田井真美 (さっぽろ天神山アートスタジオ AIR ディレクター)	橋本柚香 (札幌芸術の森美術館 学芸員)

トーク内容

- ・ 広く連携／深く連携、連携のあり方の試行錯誤
- ・ 「未来に向けて、ともに走り出してみる」という言葉「ウパシテ」
- ・ 広報や交流、本祭を補完する観点から、いい連携ができる
- ・ 冬のアートをさらに楽しむ、連携することで広がる新しい可能性
- ・ もう少し踏み込んだ形の連携をする余地はあるか



インタビュー全編はYouTubeでご覧いただけます。
<https://youtu.be/6t4tbRzwmwRc>



Q 「みんなでウパシテ!!」への継続参加について教えてください。加えて、活動になにか変化や発展があれば紹介してください。

沼山： SIAF2017ディレクターの友友良英さんと親交があり、2024年は「友友良英 & NMA presents 札幌ミーティング」を実施しました。さらにACF(札幌芸術・文化フォーラム)という団体としてもSIAFと共催でトークを実施しまして、地元の文化関係者のみなさんとSIAF本祭とはすこし異なる視点から、SIAF2014ディレクターの坂本龍一さんを振り返るということもでき、非常にいい連携ができていたと思います。

来嶋： SIAF2024の会期中にギャラリー&カフェ茶廊法邑さんにてMAYA MAXXの展示を実施した際は、ディレクターの小川さんに来ていただき、その後も公募プロジェクトを通して出会ったみなさんといろんなところでお会いしました。2025年も再びMAYA MAXX展で連携できて、ネットワークが大きく広がったことにとても感謝しています。私たちは岩見沢で「みる・とーぷプロジェクト」という地域活動もしているのですが、SIAF2024では他団体との交流の機会も設けていただき、私たちの活動もみなさんに伝えることができ、すごくよかったなと思っています。

赤坂： 2年連続で連携した「サッポロ・パラレル・ミュージアム」では、SIAFとの連携で認知が大きく広がり、SIAF2024ではディレクターや連携企業のみなさんにもご覧いただきました。まちなかで通りすがりにご覧いただくような環境で実施した展覧会でしたが、アートとしての価値を強く打ち出しつつ、アートの文脈でみんなで深く考えることができたのかなと思っています。

今村： 「サッポロ・パラレル・ミュージアム」の前身として「さっぽろユキテラス」という企画もありました。パラレルになってからの変化としては、都心の回遊を目的としている企画なので、「ぐるぐる回って札幌を楽しんでもらう」というところで連携の意味は強まったかなと思っています。いつも広報に苦戦しているので、ツーリストの視点から見ても、「みんなでウパシテ!!」のように一度にさまざまな文化イベントの情報が提供されることは心強いなと思っています。

小田井： やはり一番ありがたいのは広報面です。天神山アートスタジオは郊外の、他に文化施設がないような場所にあるので、SIAFの広報力はありがたい、今後も連携を続けていけたらと思います。また天神山アートスタジオはアーティスト・イン・レジデンスの施設ですが、単に宿泊をするだけの機能ではなくて、作品が生まれるまでのプロセスを紹介して、丁寧に市民生活と接続させる等、そうした仕組みの部分でも関わられる連携ができていくといいなと思います。

趙：今回はJR手稲駅で、北海道科学大学の学生による作品展示を行いました。メディアデザイン学科では、具体的なスキルを学ぶだけでなく、それをどう発信するのも含めて練習するような講義をしていて、今回こうして多くの方々の目に触れる機会をいただけて本当にうれしく思っています。私はアルスエレクトロニカに大きな影響を受けまして、日本でも、母国の韓国でも、それに近い機会があるといいなと思っていました。学生たちと社会の接点ももっとつくっていききたいので、なにかお手伝いできることがあればお声がけいただけたらと思います。

梅村：本郷新記念札幌彫刻美術館として、札幌彫刻賞受賞記念の藤原千也さんの展覧会と、さっぽろ雪像彫刻展で連携し、広報の面で非常に協力していただいています。「みんなでウパシテ!!」の冊子がすごくいいとっていて、当美術館は中心街から離れた場所にありますので、まず知ってもらうという点で重要だったと思っています。ただ明らかに来館者が増えたとか、そういう効果はまだ感じられていないのですが(笑)、SIAF本祭のない年もこうして地元関係者との繋がりができることはすごくいいことだと思っています。

橋本：今回は札幌芸術の森美術館で開催した「札幌美術展 マイ・ホーム(仮)」で連携させていただきました。やはり道外・国外から多くの方が観光で訪れる冬の時期に、芸術祭との連携を通じて多くの方に知っていただけたのが、何よりよかったなと思っています。札幌芸術の森は「豊かな大自然と、都市、芸術文化が調和した環境づくり自然と芸術の融合」を目指していて、札幌市南区のかなり郊外にある文化施設ですが、雪景色と芸術を一緒に楽しめる場所がある、というのを道外・国外の方に広く知っていただけた、というのがよかったなと感じたところです。

「みんなでウパシテ!!」
ガイドブックPDF
(2025年1月～2月実施)



企画・編集(テキスト・動画)

札幌国際芸術祭実行委員会事務局

葛原信太郎、佐藤華林、佐野和哉、詫間のり子、
細川麻沙美、松本知佳

デザイン

白井宏昭

発行

札幌国際芸術祭実行委員会／札幌市

〒060-0001 札幌市中央区北1条西2丁目

札幌時計台ビル10階

TEL：011-211-2314 E-mail：info@siaf.jp

ウェブサイト：https://siaf.jp

発行日

2025年3月31日



札幌国際芸術祭実行委員会／札幌市

Sapporo International Art Festival Executive Committee and City of Sapporo